

8D-1

Summer Camp

'75



夏合宿 1975年 8/6 ~ 8/28

D班 藤倉, 望月

野崎, 富田

望月英臣

20-2

第一日目

尻屋崎を見物して陸奥市へ
 帰る途中、先頭から、野崎、富田、
 私の順に走っていた。私は先の二人
 よりは少し離れてついていった。

その時だった、先の二人が軽く衝
 突したらしく、ゆくりとおり重なる
 様に倒れた。私は彼らがなかなか
 起き上がらないのをいぶかしく思い
 ながらそのまま走った。着いてみ
 ると、なんと、富田の自転車のフロ
 ントフォークは手前に15cm位曲っ
 てしまっている。彼自身もけがを負っ

ていたのだ。

そして、野崎はと見ると、彼の
 自転車はリヤキャリヤが曲っていた。
 その事故の様子は、野崎が
 止ってあとの人を待っている時、
 富田が自分の自転車の具合を

見ながら走っていて、野崎の自転
 車に気付いた時は、あと数10cm
 しかなく、かなり激しく衝突した
 のだった。
 フロントフォークが曲るほどの
 衝突だったのに、ワイマンのリムは
 ぶれがほとんど生じていなかった。
 なんて強いらりなんだろう。

みんなてなんとかその自転車を直して、少し進み、名もない海岸でテントを張った。(30 km)

第二日目

陸奥市へ着いて、昌田の自転車を修理してもらい、私もコンタクトを買って取りつけた。そこでB班の人達に会った。堀達と会えてとてもなつかしかった。

それから眼鏡店へ行き(前日の事故で昌田の眼鏡のレンズが壊れた)レンズを入れた。それから、一路野辺地を目指した。

陸奥藩の東岸をたどると南下する。時々右手に海が見える。他は林に囲まれた中を道は真直ぐに続いている。

海辺ではなく、はるか内陸を歩いていく様子を錯覚を覚える。

日暮に野辺地に着いた。祭りでのやぐらに建ち、人出が多かった。材木屋さんの仕事部屋で泊めてもらった。(70 km)

第三日目

野辺地から輪行して、青森で藤倉さんと合流し、三厩下

車した。竜飛へ行って帰る途中の

り取り振のカーブで、私は転んだ。

アッ、しまった。ヤバイ

青函トンネルの工事中のため、ケ

ンブガウナリをあけて走っていた。

しかし、すぐうしろにダンプがっついてい

なかつたのは幸運だった。

「助かった。本当に助かった。」

三厩にもとめて、とこで泊るうかと弱

っていたら、飄然と杉浦さんに出会

った。ヤして運よく、三厩本町

会館に（班と一緒に泊ることか

てきた。

その晩が班は始めて夕飯を自炊

したのだ。た。腹いっぱい食べて、あとは

気持ちいい畳の上でのんびりと寝た。

(20 km)

第五日目

金木へ行き、太宰治の生家へ訪

ねた。そこは今では、斜陽館という旅

館になっていた。玄関の柱の太さが40cm

四方はあり、黒々と光り、威圧感があった。

太宰治がこの玄関を通り、この柱に

よりかか、たのだと思うとしても親しみ

がわいた。

ここが当時、貴族院議員を歴任した

ほとどの津軽第一の名士「津島家」であ

り、又津島修治(大宰治の本名)の
一生に渡る苦悩と奮闘の源な
のた。

だが今は、ひっそりとした地方旅館
である。

夕暮の迫る頃鯨ヶ沢に着きデ
ン
トを張った。
(30 km)

第六日目

近くの家の人が西瓜をいたた
きみんまで食へた。がもめか松蓮
の頭上を低く飛ぶ、その影がく、
きりと地面に映り、地をなめて紫早
く通り過ぎる。

見上げる真白ながもめか、小さくなっ
て青空に吸い込まれていく。海は紺
青色で波は低い。のどかな朝だ。
冬のきびしい東北の海を知らな私
には、のんびりとしていても住み
よい所に思えた。

のんびりし過ぎて、出発は11:30にな
ってしまふた。岩木山の南を通り弘
前へ向う。

弘前では旅館の客引にのせられ、
結局そこで泊ることにする。木造モル
タル二階建てで部屋は小さく、どこと
なく汚れていた。夜は旅館の石前が、
まっ赤オニイ光っていた。今でもは、きり
しないのだが、どうも連れ込み旅館

P.O. 4

の様な気がしてなうなかつた。

(40 km)

第七日目

十和田湖へ向う。しかし、私達が

来る少し前に津軽地方を龍衣、た台

風がもたらした豪雨は、大鱈^{オホカサ}明

の丸割の家屋を浸水させ、西から

十和田湖へ通じる唯一の道路であ

る国道102号線を、すたすたに寸

断してゐた。

家屋を流されたり、肉親を失った人

々もいた。本当に御気の毒に思う。

私達は、青森から八甲田山を越

え、十和田湖へ向うことに決めた。

そして黒石市を発ち青森まで走

た。青森では青函石りー乗り場の

デラックスなセルの中の、運転手休憩

所で泊った。冷房がさきすぎた寒か

つた。

(50 km)

第八日目

八甲田越えはきつかった。10%の

勾配の坂が数回も続いた。ギアを

フロントキリヤも全部ロートにしたが、

それでもほんのさかほのさきが苦しい。

しかし、日は照っていなくて、雨霧が

かがっているのて暑さは感じない。
道の両側に壁の緑をそがえる
木の緑が、水気を帯びてしっとり
りとしている。そしてヤ、と標高
1040 の笠松峠にいた。こね以上
登らなくてはいいという安堵感で
いた。ばいた。た。

暗く冷たい水面が光る十和田湖
にいたのは夕暮りだった。宇樽部
の民宿に泊った。その娘を誰か
か「ひなにまねなる美人」^したと言
うと、それまで意識していなかった
のに、急に気になって女の顔をじ
っと見ると。

それほとてもない人たりなあ。

(80 km)

第九日目

今朝はぬけるような青空だ。毎
日雨が籠っていていやだ。たのた、今日
は晴れたのだ。湖のまわりの空に
白い雲がほかりほかりと浮んでいる。
湖水の青さが目にしみる。そして休
屋へ走り出した。木漏れ日の中を
湖に溶うて走る、快適だ。
ちよとした坂がある。一気に登
る。かき上げて登って先を見るときまた
上りた。そこで又かきまで行ってみる
と又又上り、しかも勾配はきつくな
る一オだ。あせってくる。もう必死
でこぐ。こんな所にきつい坂はない

はずなんたけとなあ。

8D- そのうちに野崎とデッドヒート

を展開したあけく、抜かされて、

へへへになつてや、と上り切るとそ

こが林屋た。た。人騒がせな林屋

た。

三戸について酒宴をひらく、酔って

いゝ気分だ。星がきれい、野崎が

星座のギリシャ神話を話す。

「ゼウスはねー、いろんな女神

に……」

(60 km)

第十一日目

この頃は朝の用意が遅くなくて、

11時30分頃やと出発するといふ日

が続いた。そんな時、種差海岸の

キャンプ場での未明のことである。

「日の出だ。」とす。とんきよう

な声を出して、富田がテントを出てい

た。何事かと思つた私は、寝起き

のぼんやりした（日頃は理知的な

のだが）頭で昨夜のことを思い

出した。富田は「明日は日の出

に起きよう。」と言っていたのだ。た。

たかお人の冗談たはかり思っていた。

しぶしぶ起きて外へ出ると、日は

出たばかりだ。た。海の上に真赤な

太陽が出て、水面にこちらに
向って真直ぐな光の道ができて
いる。身がひきしまる思いがす
る。

宮田は自転車をかっいで岩
の突端に上る。そこで写真を撮ら
ナリ。

(80 km)

第十二日目

今合宿中初めにして最後の
名所へ行く。水深20mの地底
湖を持つ龍泉洞だ。水の透
明度の高さには驚いた。

日が暮れてから、海岸沿いに宮

古へ向う道にもとって来た。ライト
の乾電池を三人分九本買い、これ
でもういくう時間かかたても宮古
まで行くんだと自分にいい聞かせ
る。宮古まではあと40kmだ。

しばらく行くと藤倉さんがパン
ク。修理をして、パンを買って食べる。
田老町まで行って、又藤倉さんの
自転車のタイヤの空気がぬける
ので修理する。もう午後10時を
過ぎていている。宮古まではあと14km
上ったり下ったりの道なのでかなり
きつい。

気分転換にと紅茶を沸かして
いたら、7君達、何してらんた

6 由。と申年の警官がや。て来
た。『いやな奴が来たなあ』と思
う。富田がいろいろ質問に答

える。

『……それで、富田ではどこ

で泊るんかぬ。』駅の待合室

で泊ることにしていたが、

『友達の家で泊めてもらうう

ことにしています。』と気転を

働かせた。

そして、富田の街の灯が見

えるドライブインまでようやく

つき、浜っ娘ラーメンを食へる。

富田市内に入ったのは、午

前の時を数分過ぎてからだった。

全走行距離 660 km
(100 km)